

## 「高齢聴覚障害者の暮らしを施設で支える」

共同研究者 社会福祉法人 大阪聴覚障害者福祉会 あすくの里 施設長 吉見 剛二

助言者 一般社団法人 京都府聴覚障害者協会 福祉労働対策部長 篠田 あゆみ

司会者 特別養護老人ホーム 淡路ふくろうの郷 竹原 哲章  
特別養護老人ホーム いこいの村・梅の木寮 渡部 泰之

### はじめに

第4分科会では、「本人の願いを引き出して寄り添う」ということをテーマに、レポート発表と討論を行いました。

参加者は高齢聴覚障害者施設職員やろう重複施設関係者を中心に29名の参加がありました。レポートは6本ありました。

### レポート報告の概要

#### (1)「日々いきいきと暮らす」

あすくの里  
増田 雄一

ショートステイという、家庭での暮らしを中心として、施設を利用する短期間の暮らしをどう作っていくのかという課題に苦慮しているとの報告でした。特養の取り組みに参加していただいたり、デイサービスとの連携を考えているとのことでした。

また、日々できる取り組みとしては、洗濯ものたたみや洗い物などのお手伝いを進めている。しかし、忙しい中で入居者と一緒に行うということが難しい。そして、職員同士の協力する意識も作りにくい状況もあり悩んでいる。

職員が不足していて日々の支援で精いっぱいの中でできたことを評価することも大切である。また、ろう者同士が同じ空間にいるという安心感もあるのではないかと。

#### (2)「『知人との金銭トラブル』のない新しい生活の場へ後押ししたもの」

特別養護老人ホーム ななふく苑  
金川 直美

地域で暮らしているときに、知人からお金を無心され、金銭トラブルに困っていた。トラブルの回避のためにななふく苑のショートステイを利用されるようになった。そこで出会った友人と信頼関係を築くことができ、安心した生活が施設での生活に見つかった。引っ越しの時には、近所の方や関係者への挨拶をすることで、新しい生活への区切りとすることができたとの報告でした。

認知症の進行からか弟さんへの不信感を持つようになった。安心した生活が送れるようになり、弟さんへの不信感も薄れている様子もあり、姉弟の関係の維持も課題である。

地域と施設を繋ぐコーディネートが大切である。ケアマネからショート担当者、特養担当者へと情報交換を行うことが必要である。また、受け皿となる施設の役割が大切である。

#### (3)「高齢化する利用者に対して工房のあり方とは？」

京都市聴覚言語障害センター  
京都市西ノ京障害者授産所 青空工房  
木元 一紗

高齢化する通所者が増えていく中で高齢に

なっても仕事をしなければならぬのか、職員としての悩みの報告でした。

高齢の通所者Dさん、Iさんの事例の紹介があり、作業中に寝てしまったり今までと同じ作業ができなったりしてくる中、なぜ、青空工房に来るのか疑問がある。

また、DさんやIさんの思いを引き出すことも難しく、どのように思っておられるのかもつかむことが難しい。

しかし、青空工房などの聴覚障害者の作業所の役割は、働く場の提供だけではない。聞こえない方の資源が少ない中、聞こえない方同士が集まり、居場所になっているのではないか。

#### (4)「土居文子様のご長寿祝いと自分史の取り組み～私は100歳です～」

特別養護老人ホーム 淡路ふくろうの郷  
山田 繁和

今年101歳になった土居文様様の自分史作りの取り組みと大腿骨骨折から車いす生活になり、歩行訓練から歩行器を使っての歩行がかなうまでの様子の報告でした。

大腿骨骨折をしても、また歩きたいという強い気持ちを持っていた土居様を尊重し、見守りながら、歩行訓練を行った。100歳を超えて骨折からの歩行ができるようになった。

今後はさらに身体的機能の低下が予想される中、これからの人生を本人の気持ちにどのように寄り添い支援していくのかという報告でした。

#### (5)「最後の時に寄り添って」

あすくの里  
重松 敦子

乳がんを患いAさんのターミナルケアを通して、反省も含めて施設としての役割について、本人の意思に沿ったターミナルケアの受け入れについての報告でした。

病院にいるときには、ご飯を口にしようとしなかったAさん、施設に戻ることで食事も少

しづつ摂っていただけるようになった。リビングに行きたいとの思いも聞かれた。

しかし、弟さんともっと早く会ってもらいたかった、「頑張っておいて」と言いすぎたのではないかなど、課題はたくさん出てきた。

ターミナル期に入る前に、ご本人の意思の確認をどのように取り組むのか課題がある。

入院するとコミュニケーションが取れないことで拘束されたり、認知症が進んだりすることが多い。高齢聴覚障害者にとって、手話でコミュニケーションがとれる場所は大切である。最後まで、コミュニケーションが保障されるということが入居者の安心につながる。

#### (6)「人生を語る・人生から学ぶ～ふくろう学びあい文庫～」

特別養護老人ホーム 淡路ふくろうの郷  
橋詰 恭子

暮らしの4本柱を中心にした支援から、回想法の取り組みにつながった。そこで聞かれた入居者の人生をまとめ、自分史作りへと続いた。

これまで第4弾まで発行されている「ふくろう学びあい文庫」の編集を通して知った入居者の過去のつらい経験や生き方から学び、後世に伝えていく取り組みについての報告でした。

入居者は、本やDVDの発行をきっかけに、出前講座などを通して、人生を語ることで今まで負の遺産だと感じていた経験に耳を傾け、受け止めてくれる人がいることでプラスに転化していった。

また、職員は、編集作業は大変だが、入居者の人生を紐解く作業の中で入居者を知り尊敬の気持ちが生まれ、人生の締めくくりのお手伝いへの意欲となった。

そうした役割が、施設にもあるのではないか。

#### 討論について

6本のレポート発表を踏まえ、施設で高齢聴覚障害者を支えるための3つのキーワードをもとに討論を進めました。

- ① 本人の願いを引き出して、寄り添う。
- ② 高齢聴覚障害者の暮らしのイメージとは？
- ③ 社会資源の活用について

参加者全員に、①②③についての意見を述べてもらいました。

後見人をしている方、高齢聴覚障害者施設の職員、ろう重複施設の職員など、それぞれの立場での経験をもとにさまざまな発言がありました。

未就学の方の支援で、支援者と本人の中で通じる共通の言語を作り、定期的な家族との時間を作った。

仲間と担当職員が誕生日にいっしょにお出かけをする「なかまの日」の取り組みがある。どこに行きたいか何をしたいかなどを聞き取る中で、本人の思いに接近できる。

聞こえない方が集まれる場所が少ない。社会資源自体の不足を感じている方が多くいました。地域では、就労支援B型の作業者が高齢聴覚障害者の受け皿になっている現状もある。デイサービスなどを頑張っている地域もあるが、入居施設は少なく、遠くに行かなければいけない状況である。

②暮らしのイメージについては、なかなか意見が出ない状況でした。

利用者の人生を知る取り組み、自分史作りなどを通して、利用者が望んでいる「暮らし」を知る取り組みが大切である。

## 最後に

共同研究者からは、利用者のことを日常的に職員集団の中で話題にしていくことが大切である。介護の方法だけではなく、入居者の人生に興味を持ってかかわることが必要である。

施設の役割は、ろう者の集団があること、利用者の役割があること、利用者が認められ輝ける場所であることである。

また、入居者の人生を知るためには聴覚障害者協会と一緒に活動していくことが大切であ

る、との言葉がありました。

助言者からは、施設や事業所で知った高齢聴覚障害者の実態を地域の聴覚障害者協会や手話サークル、手話通訳問題研究会へ提供してほしい。また、聴覚障害者協会へ職員研修の講師を依頼するなど連携を凶ってもらいたい。

ともに活動する仲間として、聴覚障害者をもっと使ってもらいたい、との言葉がありました。

どのレポートからも『利用者』から学ぶことの大切さを教えていただいた。

利用者の皆さんが、どのような思いを持って生きてきたのか。そして、今利用者を取り巻く環境は、その方々の居場所や満足に繋がっているのか。「ここに来てよかった」と言っていただけ支援ができていいのか。目新しいことをするのが大事なのではなく、「自分が必要とされている」「自分はここにいて良い」「自分はここで頑張りたい」などと思えることが大事。

何かしらの役割を持って頑張れることは、本人の生きる意欲に繋がっている。

自分の体験を知ってもらい、そのことが他の人からの自分への評価に繋がる。

『人』が『人』とどのように関係性を築き上げていくのかを私たちは利用者支援を通じて再確認することができる。

今後も、利用者を知り、利用者の思いを実現させ、利用者も職員も気持ちを満たしていく、そのような支援をしていきましょう。